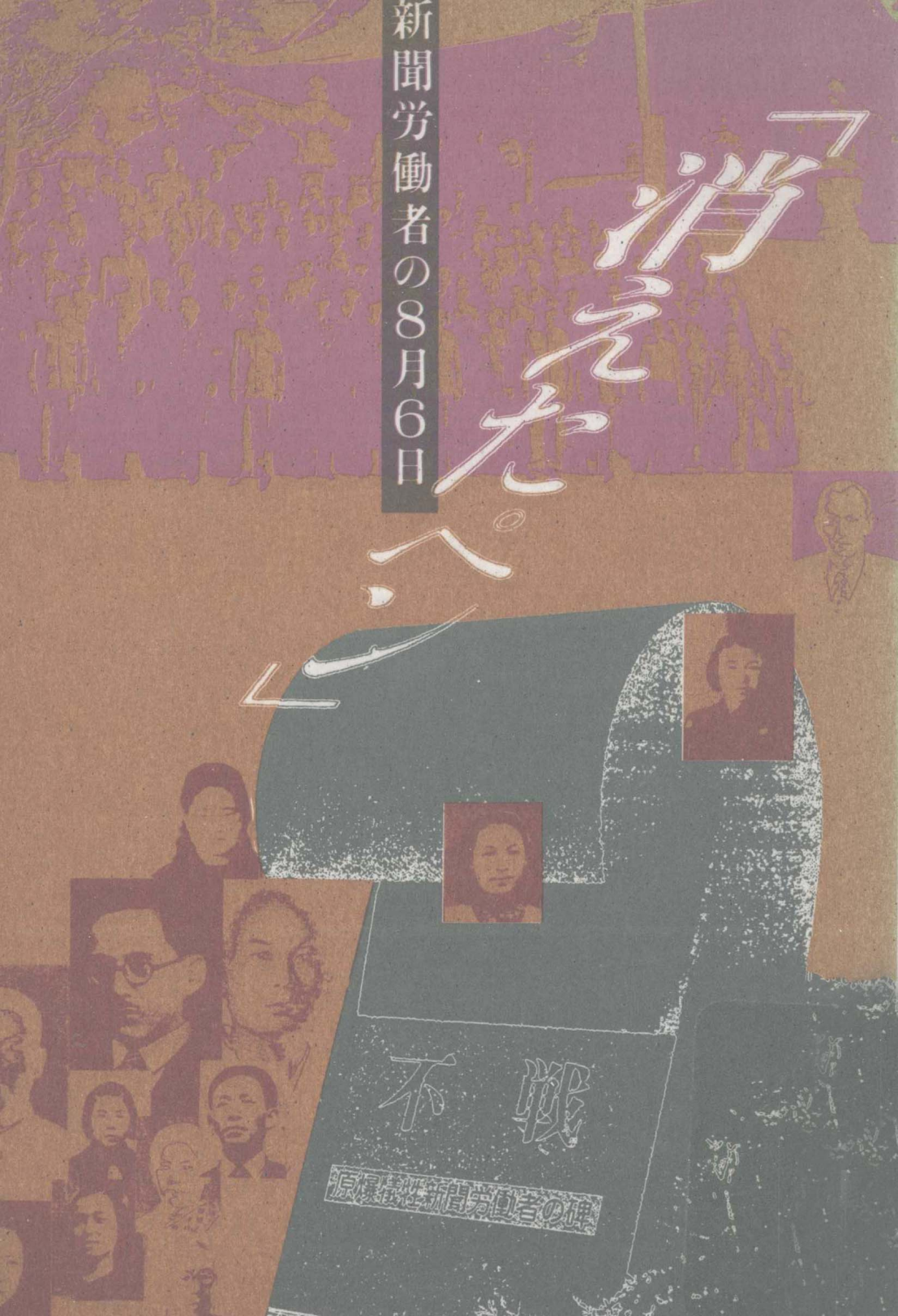
# 「消えたペン」

## 新聞労働者の8月6日



# 消えた！ペン

## 新聞労働者の8月6日

中国新聞社編・著

**中国新聞労働組合**

連絡先

〒733 広島市中区土橋町7番1号

☎082(236)2427

**消えたペン** —新聞労働者の8月6日—

1988年7月18日　第1刷発行　　定価1500円

編　者　中国新聞労働組合

発行者　吉　元　尊　則

発行所　株式会社 汐　文　社

東京都文京区本郷1—26—10

TEL03(815)8421 振替東京2-14150

印　刷　株式会社 飛　来　社

落丁・乱丁の際はお取りかえいたします

ISBN4-8113-0105-6 C0036

# 消えたペン

新聞労働者の8月6日

装幀　ピープル

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

# はじめに

広島の平和公園から、本川に沿って少し南に下ったところに、高さ一メートルほどの小さな碑が立っている。中国新聞労働組合が被爆四十周年に当たる一九八五年八月六日に建立した「不戦　原爆犠牲新聞労働者の碑」。私たちはこの碑に、無念の死を強制された先輩たちを追悼し、戦争のためには二度とペンやカメラを持たず輪転機を回さない誓いを込めた。ピース（平和）の頭文字Pをかたどった碑の形は、見ようによっては大本営発表をそのまま報道し国民に大きな惨禍をもたらした過ちを詫びて深く頭を垂れているようにも見える。

私たちの調査によると、あの日、広島の新聞、通信社で働いていた百二十六人が原爆の犠牲になった。内訳は中国新聞の百十四人を筆頭に同盟通信（共同通信の前身）五人、西日本新聞、読売新聞各二人、朝日新聞、合同新聞（山陽新聞の前身）、毎日新聞各一人となっている。原爆の炎に焼かれる中で、先輩たちは何を思ったのだろうか、戦意高揚記事ばかり書かされる中で何を感じていたのだろうか――。碑を建立するだけでなく、私たちは百二十六人の人生を知りたいと思った。それを取材する中で核時代の報道の在り方を探っていきたいと思った。

取材の手がかりを求めて、私たちはまず東京に中国新聞ＯＢの大佐古一郎氏を訪ねた。現役時代から原爆の告発を続け、被爆者援護法の制定を訴え続けてきた老ジャーナリストは黄色く変色した一枚の印刷物を見せてくれた。三百六十三人の名前を連ねた「中国新聞社国民義勇隊編成表」。当時の戦争指揮者たちが本土決戦に備え、職域や地域ごとに編成した召集令状がなくても集められる軍事組織だった。十五歳以上六十歳以下の男子

と十七歳以上四十歳以下の女子を対象に編成されていたというから、正規の軍人でなくても当時は文字どおり「国民皆兵」の状態だった。この国民義勇隊には、広島にあった他の新聞、通信社の人たちも編入されていた。

原爆投下のあの日、国民義勇隊からは当時の広島県庁の建物疎開作業に約四十人が動員させられ、全員が死亡した。大佐古さんは当時の同僚たちの名を指でたどりながら、彼らの最後の様子を教えてくれた。そして、二度とあのような惨禍を起こさせないよう若い人たちが頑張ってほしいと励ましてくれた。

広島へ帰った私たちは、中国新聞などの被爆者四人から当時の体験を聞く会を開いた。大佐古氏からお借りした国民義勇隊編成表を見せるとこの方々は、犠牲者の思い出話をいろいろ話してくれた。原爆の記憶が時を経ても鮮烈なように、何人もの同僚を一瞬のうちに失った無念の思いもこの人たちには強かった。遺族を訪ねてもっと、もっと話を聞かなければ――。若い組合員たちに呼びかけ、遺族聞き取り調査班をつくったのは、一九八五年三月二十九日だった。

私たちの突然の訪問を遺族のみなさんは快く受け入れてくれた。最初は表情の硬かった人たちも目に涙を浮かべ、犠牲となった夫や妻、父や母、兄や妹のことをまるであの瞬間から時間が止まってしまったように克明に話してくれた。こうした話の中から、私たちは、戦争を呪いながらも強制されてペンを走らせた先輩の姿、夫を兵隊に取られ生活のために勤め始めた新聞社で犠牲となった先輩の無念、父も母も失い焦土の広島を消息を求めて尋ね歩いた子供たちの悲惨を聞き取ることができた。その一方では「誰にも話したくないことなんです」と、取材を断られるケースもあった。そうしたことを経験する度に、私たちは四十年以上を経てもなお、大きな傷跡を残す原爆を身にしみて痛感することができた。

取材を終え、思いだしたくない話をうかがったことを託びて帰る私たちの足どりは重かった。字にするのにはあまりにも悲しい話ばかりだった。亡くなった父母を尊敬していると胸を張って話す遺族のいる一方で、戦

争後に離婚した嫁をなじる人もいた。命を奪っただけでなく今も愛憎を絡み合わせる原爆の実態をどう描けばいいのか。いくら想像力を働かせても正確につかむことのできない被爆の惨状をどう書けばいいのか。私たちは悩みながら重いペンを手にした。

仕事の合間の取材は困難な作業だった。四十年という時の流れがそれに輪をかけて取材を難しいものにした。わずかな手がかりを元に訪ねて行っても、目指す遺族の方はすでに他界され、当時を知る人が誰もいないこともあった。当初、この「消えたペン」は、中国新聞関係だけでなく全遺族から聞き取るつもりだった。しかし、こうした事情と私たちの力不足で他社関係は、寄稿のあった山陽新聞だけにさせてもらった。また、中国新聞関係でも数人の遺族の取材がまだ終わっておらず、この本に収録できたのは七十三遺族にとどまっている。心からお詫びするとともに、別冊への収録をお約束したい。

ことしの八月六日、私たちは、この「消えたペン」を先輩たちの名前を刻んだ不戦の碑にささげる。そして、二度とペンが消えないよう私たちの言論活動を律するとともに、核兵器廃絶へ向けたペンや運動を強めることを誓う。こうした活動を通じて、私たちは必ず不戦の碑の前で、世界から核兵器が廃絶されたことを報告したいと思う。

一九八八年七月

中国新聞労働組合不戦の碑実行委員会

◉目　次◉

はじめに 3

炎熱のもとで取材したこと……大佐古一郎 9

〈記録〉新聞労働者の1945・8・6……19

相川愛子さん(21)／相原利夫さん(23)／有馬軍治さん(25)／井川勝雄さん(28)／伊藤音三郎さん(29)／石井道子さん(32)／石井諒一さん(36)／出雲初一さん(39)／今田レツさん(42)／今出良秋さん(44)／上田照子さん(46)／後チサ子さん(50)／小野一明さん(53)／落窪ミカさん(55)／神田留次郎さん(57)／木原フサヨさん(59)／北山一男さん(63)／串本繁さん(65)／桑原玉江さん(67)／小迫周蔵さん・美津枝さん(68)／小谷増夫さん(70)／河野秀三さん(72)／佐伯カメさん(75)／佐上美代子さん(77)佐々木猪勢治さん(80)／佐瀬実さん(84)／坂本定造さん(86)／下本キクエさん(88)／下江達重さん(91)／新城朝子さん(96)／

杉野勝吉さん(97)／高田久子さん(100)／竹前省三さん(102)／千葉恭子さん(105)／寺尾政之さん(107)／寺本嘯三さん(108)／戸田正記さん(111)／伴谷ヤスヨさん(112)／中井ヨシヱさん(114)／中野勝正さん(115)／仲伏一之さん(118)／中村正男さん(121)／難波くみ子さん(124)／西村静一さん(126)／馬場謙一郎さん(128)／橋本令一さん(130)／桧山八重子さん(132)／平本ウメ子さん(134)／深川庄三郎さん(136)／福井ミツヱさん(137)／藤勇哲さん(140)／法安雅次さん(143)／細川儀一さん(146)／前田英子さん(148)／三木芳郎さん(150)／三田久二さん(152)／三好友太郎さん(155)／水原智識さん(157)／宮武松三郎さん(161)／宮本軍一さん(163)／宮本澄香さん(165)／宮本藤吉さん(166)／望月慶三さん(168)／矢田茂さん(170)／保田博さん(173)／山井治吉さん(176)／山根喜美子さん(179)／山本利さん(181)／横田恂治さん(185)／横山隆二さん(186)／吉田芳夫さん(189)／若林ツネヨさん(190)／藤間侃治さん(192)

戦時編集局の八月六日……卜部清隆 204
逝ってしまった先輩たち……兼井亨 209
原爆と私……下住忠 214
涙でうるんだファインダー……松重美人 218
おわりに 224

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

# 炎熱のもとで取材したこと

元中国新聞記者　大佐古　一郎

「キィーン……！」とつじょ、大きな金属音が長い尾を引いて聞こえた。この音は、低空を高速度で飛ぶ戦闘機の爆音だ。私は反射的に庭の一隅へ飛び出て空を見上げた。屋根と裏山、それに二本の大樹にさえぎられて視界には何も見えない。と、多量のマグネシウムを一挙に燃やしたような強烈な閃光（せんこう）が眼をくらまし、視界は真っ白になった。〝何かが爆発した〟と直感した私は、とっさに、

「机の下に逃げろ!!」

病妻に叫んで、かたわらの欅（けやき）の根元にからだを伏せた。……二、三秒たっただろうか。地軸を揺るがすような爆音と風圧がきた。硬いザブトンのようなもので、背後をたたきつけられたようなショックをうけ、しばらくは耳と眼に無感覚の状態がつづいた。

何秒、何十秒たっただろうか。その後の閃光も爆発音もないので、首をもたげて座敷を見ると、妻は元の位置にフトンを頭から被っている。障子が吹き飛び、畳と天井の板が持ち上げられ、壁の一部が柱の内側にはみ出て、あたり一面に土ほこりが舞い上がっている。私はどこも痛むところはない。座敷へ上がって見ると、妻は足にガラスの裂傷をうけているだけだ。

道路上へ飛び出て見ると、近所の人々が大声でわめきあっている。北の上空に、直径三百メートルもあろう

か、真っ赤に燃えた雲がモクモクと湧き上がり、その横に落下傘が一個、東北へ向いてゆっくり流れて行くのが望見される。記者意識にかられた私は〝家は帰って片づけるから〟と妻にいい残し、防空服装に身を固めて自転車に飛び乗った。

前方から真っ黒な顔に白い目だけがうつろに光る男か女かわからない人がくる。全身を血で茶褐色に染めたはだしの男、顔と両腕の皮膚がめくれ、その下から赤い肉が出ている中学生、よろよろ夢遊病者のように歩いてくる兵隊、わずかのボロ切れが腰から下にぶら下がっている女、路傍にうずくまったままの重傷者、皮膚のめくれた両手を幽霊のように上げている子供。負傷者の様相は、しだいに残酷さを増した。

「これは、ひょっとしたら軍需監理部長がこのあいだ話したウラン爆弾かもしれんぞ」

私はすぐに近くの府中町にある山本社長邸へ足を向けた。出窓からのぞいた私の目に、ガラスの破片で、背中にキズをうけている社長の姿が映った。

「本社あたりがやられたらしい。君、もし行けたら見届けてきてくれ。それに昨夜の空襲以来、勤務中の利(とおる)(社長の長男で中国軍管区指令部報道部中尉、応召前は社の編集局長)のことも心配だ。なんの連絡もない」

私は大洲付近の惨状を伝え、比治山方面から入市してみるといって社長邸を出た。

大正橋を渡って段原(だんばら)町へ出た。火の手は百メートルまで迫っている。倒壊した町には、かつて経験したことのない異様な臭気が道路上にウズ巻き、倒れた二階家や電柱、電線が道をふさいでいる。私はついに自転車を、そこに置いた。その傍らの材木の下には、血反吐(へど)と緑便を出して死んだ裸の幼児がいた。

中心部への突破口はないものかと五十メートルも進むと、火炎は目前でバリバリと音を立ててこちらへはってくる。その炎に向かい、血みどろの赤ん坊を抱いた母親が狂気のように何かを叫んでいる。その近くまでは い出してきた老人の肩の傷口から白い骨が見えた。

「兵隊さーん……」
と呼ぶ弱々しい女の声がする。くずれた屋根の下のすきまから中年の女の白い顔が見える。私の服装と赤い腕章から兵隊に見えたのだろう。
「助けてください……。ちょっと手を貸してください……」
「待っていなさいよ。なんとかしてあげますけえ」
私は火の回らぬうちに、と思いながら防空ズキンや上衣を脱ぐと、上のカワラと垂木を取り除くことに懸命になった。最後に残った長い重い柱を力いっぱい持ち上げると、女はゆっくりとはい出してきたが、横腹の傷口からタルの栓を抜いたように、ドッと血が吹き出し、そのまま声もなく死んでいった。

広島駅前も炎の中にあった。
電車の終点に、重傷のため虫の息になっている女の傍らで、無傷の幼児が女の胸にしがみついて大声で泣いている。私はもはや思考力も人間性もなくなるほど頭がぼやけ、この母子は間もなく、〝焼け野のキギス〟のように焼け死ぬだろうと考えた。と同時に、私は幼児を抱き上げた。
「子供は助けるぞ！」
と女の耳元にどなると、そのまま駅の構内から線路を横切り東練兵場へ出ると、十数人の負傷者がころんでいる中へ、
「この子を頼みます」
とひとこといってまた駅前へ引き返した。先刻の母親は、もう動かなかった。
大須賀町は火の川である。この短い町を突き抜けると、栄橋のたもとへ出て、社に近い幟町へ行ける。すで

にパンクした自転車を町の入り口に乗り捨て、防毒面とズキンを被ると、鉄カブトで水槽の水をくんで頭から何杯も何杯も浴びせかけた。手さえ保護すれば突破できると思ったからである。

燃えさかる大須賀町を饒津(にぎっ)神社へと一気に突っ走った。

神社の境内は、どの樹も八つ裂きになり、石灯籠はとばされ台石だけが残っている。路上と境内は負傷者で埋まり、

「水をくださーい、水を……」

「お母さーん」

「苦しいよーう。助けてェ……」

の声が充満している。

常盤橋北側の鉄道橋のガード上で、横倒しになった貨物列車の石炭車が燃え上がっている。私は境内の石垣にすがって、しばらく休息しながら、周辺の阿鼻叫喚の状況をぼんやりと見ていた。

道路上で男女がいい争っている大声がする。破れた将校服に、軍刀をツエにした若い軍人と負傷した主婦である。

「とにかく、おまえらのやり方がわりいけえ、こういうことになったんじゃ……」

「自分たちは陛下のご命令どおりにしてきたまでだ」

「バカをいえ、空襲警報も出さんで、それがご命令か。それが軍隊か……。このケガ人や町の中で焼け死による人がわからんのか……。兵隊さーん、恨むぞう。子供や主人を返してくれーえ……」

「恨むならアメリカを恨みなさい。自分は責任をとって、いつでも切腹してみせますぞ」

「そうじゃ、腹を切れ！　腹を……」

そのあとは、泣くともわめくともわからぬ女の声がいつまでもつづき、負傷した将校はトボトボと総軍司令部のほうへ歩いて行った。

午後三時ごろだったろうか。劫火もようやく下火になり、爆心地付近の電柱や大樹の幹だけが燃えているころ、私はときおり取材に出向いていた中国軍管区司令部前の西練兵場にたどりついた。

二、三メートル先に倒れている男が「ヘイタイさーん……ヘイタイさーん」と私を呼ぶ。顔や両腕がヤケドで靡爛し、上半身に焼け残ったシャツがまとい着いている。下半身の破れたズボンと短グツから、被爆前の国民服姿が想像された。おそらくけさ入営兵を見送ってきた人にちがいない。

「なんですか？」

「すみませんが……顔が熱うて熱うて……火の中におるようなけえ……陽除けを……」

なるほど、焼けただれた上半身へ灼熱の陽光が照りつけ、めくれ上がった顔や腕の皮膚の下は、すでに炒り上げられた魚のようにカラカラに乾いている。

私は〝熱い、熱いことだろうなあ〟と思いながら、

「板かトタンでもあったら掛けてあげたいが、このへんには何もないし……」

「ヘイタイさーん。私のカバンの中に日の丸の旗がはいっとるけえ、あれを顔へ……」

という。私は吹き飛んできた木切れを二本ほど拾って老人の顔と胸の横に立て、その旗を木に結び、反対側を腰のバンドにはさんだ。

「あー、これで少しは楽になりました。すみませんが、水をくださいませんか」

「水を飲むと死ぬそうですぞ。元気を出していなさいよ。きっと肉親か軍隊が助けにきますけえ」

私は老人に水筒の水を一口飲ませながら話しかけると、

「なんとお礼をいってええやら、あんたのお名前を教えてつかあさいや」

私は社名と名前をいい残すと、そこを離れた。十日ほどのちのことであるが、五日市に住む同僚の大下記者が「近所の牧野さんという人が被爆二日後に息をひきとったが、死ぬまで〝中国の大佐古さん〟といっていたと家人が私に伝えてきた。ささいな親切でも、あのようなときには〝地獄に仏〟ほどのものがあるのかなあ」と語った。

軍国の牙城を象徴するかのように、いかめしく広島市内を睥睨(へいげい)していた広島城は消えていた。司令部の表楼門はすでに灰になり、銃剣を構えていた衛兵の姿もない。楠、桜、柳などの大樹は裂けて焼けただれ、半壊の橋の下には二、三匹の鯉が白い腹を出して浮いていた。

と、……私の目は前方の枯れた芝生の上に止まった。いままで見てきた酷(むご)たらしくめくれ上がった皮膚や、血みどろになった被爆者のからだとはまったく違った、美しい肌をした裸の大男が寝転んでいる。褐色の頭髪と無傷で肉づきのいい白い全身に、赤と青のストライプスがはいったパンツをはき、右腹を下に斜めに伏せている。近づいて見ると、ヒモで後ろ手にしばられた若い外国人である。アメリカの捕虜だろう。目は閉じているが紅潮した胸部は大きく波打っている。この男は、あのときの捕虜だと直感した。

七月二十八日の午後一時ごろだった。広島の上空を西へ飛んで行くコンソリデーテッドB24の四機編隊の一機が撃墜された。そのとき落下傘で降下した二人の搭乗員が、司令部内の地下重営倉に拘禁されているといううわさを報道部の将校から聞いていた。この男はその捕虜のひとりで、地下室にいたため無傷で助かり、逃げ出したところを兵隊か誰かに捕まって放り出されたにちがいない。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com